週刊 SPA!4 月 5 日号（22 ページ）

医療 5

患者の症状は多様。アトピーの子供や障害者への支援が必要

自然の猛威の前に傷ついた人々を救うために最も重要なのが緊急医療。3月19日に宮城県名取市の東北国際クリニックに到着、外来診療を担当し21日に帰京したNGOシェア（国際保健協力市民の会）のボランティア、仁科晴弘医師は現地の様子を次のように語った。

「22歳の女性が『顔の皮膚が黒ずんでいる』といって来ました。それは過緊張状態による顔面蒼白症状でした。通常長くても1、2時間程度なのに、8日間も続いているという。また、ストレスで子供のアトピーがものすごく悪化してしまったケースも見ました」

仁科医師によれば「避難所にもよりますが、アレルギー性疾患や高血圧、糖尿病など慢性疾患の常備薬の不足が目立ちます」という。シェア広報担当の飯沢幸世さんは「現場の状況は刻々と変わっています。物資、ボランティアなどで支援をする際には最新情報に注意して支援団体などに問い合わせをしてほしい」と注意を促す。

「食物でのアレルギーでは卵、牛乳、小麦がアレルゲンとなっている人が多く、配られたパンを食べられない人もいます」と訴えるのは、アトピー・アレルギー性疾患患者の電話相談などを行うNPO「アトピッ子地球の子ネットワーク」の赤城智美事務局長だ。

アレルギーのある赤ちゃん用粉ミルクなど食物アレルギー用食物を宮城県多賀城市に、ぜんそくケア用品を福島県いわき市や宮城県仙台市などに届けた。

「私たちの連絡先に、電話でもメールでもいいのでSOSの声を送ってほしい。またなるべく被災地では、野菜の煮物など比較的アレルゲンとなりにくい食事を出してほしい」と赤城さんは呼びかける。

障害者自らが運営する全国自立生活センター協議会の中西正司代表は、障害者の持つ「特殊なニーズ」について説明してくれた。

「同じ障害者同士だから、厳しい状況が容易に想像できます。障害者は一般の避難所での生活は難しい。支援を日常的に必要としている障害者にとっては必ずしも安全な場所ではありません」

車椅子用のトイレやベッド、重度の障害者には呼吸装置や電源、慣れた介助者が24時間ついていないといけない場合もある。3月19日、中西さんを代表に全国の障害者関連団体が立ち上げた東北・関東障害者救援本部が、いわき市のいわき自立生活センターから障害者8人と職員ら計33人を、東京・新宿の全国身体障害者総合福祉センターを避難先として受け入れた。だが、滞在中の食費は全額自己負担で、介助者派遣も各センターの持ち出しか、無給のボランティアに頼らざるを得ないという。

「とにかく障害者の避難生活には資金が必要なんです」と中西さんは切実に訴える。

医療支援はお金も人手もかかるもの。彼らの活動を金銭的に支えることも必要だ。

荷物中継地点で作業するアトピッ子地球の子ネットワークのスタッフたち

多くの医療支援団体が、医薬品不足に悩んでいる

シェア＝国際保健協力市民の会

保健医療支援の寄付金を募集。郵便振替：00100-1-13270／口座名：特定非営利活動法人シェア国際保健協力市民の会　※通信欄に「緊急支援募金」と記入

アトピッ子地球の子ネットワーク

アトピー・アレルギー性疾患患者と家族に対する電話相談等支援事業への寄付金を募集。郵便振替：00140-1-11748／口座名：アトピッ子地球の子ネットワークまで

東北・関東大震災障害者救援本部

障害者の避難等支援のため全国自立生活センターなどを中心に急遽設立された。寄付金は郵便振替：00980-7-40043／口座名：ゆめ風基金まで

掲載記事のシェアの緊急募金口座番号の表記に誤りがありました。

誤）００１００−１−１３２７０

正）００１００−１−１３２７３０